

【資 料】

成長体験の分析資料 (II)

水 島 恵 一

Quantative Analysis on the Cases of Growth Experiences (II)

Keiichi Mizushima

This is the continued paper for quantitative description of the cases of the "growth experiences" and other unique experiences for understanding humanity, especially its depth. The author has described those cases qualitatively and theoretically in the previous books and articles. This time, for quantitative analysis, in addition to 100 cases of the growth experiences described in the previous article, 100 cases of non-growth experiences (including pathological cases) and other 100 additional experiences (including transcendental and transpersonal experiences) were investigated. Transcendental and transpersonal experiences were very often observed as peak experiences (13/40). Cases of deviant or extraordinary sensitivity which showed special deep phases of humanity were further classified into "suffering sensitivity" (18), "deviant sensitivity" (35), "non-pathological unique sensitivity" (45), and related experiences (23.. each among 200 additional cases). Cases of mature or existential attitude formation were 65/200 including those in extraordinarily unfortunate fate. Some other categories of inner and social experiences were studied.

1. 概 要

本論は、前論に引き続き、筆者の「人間学」(有斐閣双書)及び「人間性心理学大系全10巻」(大日本図書)(特に第1巻2章)で考察の対象としてきた体験事例300例を概観するものである。前論では成長体験例100例を中心に、その契機、過程、内容のみてきた。本論ではそれに200例を加え、第1に共同存在、自己超越の体験を取りあげ、第2

に感受性の高次の側面、自覚的態度形成、社会・人類的存在性の体験を取りあげる。その中で人間のさまざまな可能性・生きがいに焦点を当てながらも、人間の限界の中での実存、苦悩や苛酷な運命の中での実存に目を当て、さらに弱い凡人、障害者、少数者などの実存にも目を向け、弱者や疎外された人々の人生を含んだ人間の生き方へと探索をすすめるものである。

念のため300例の内訳を再度記すと次の

ようになる。

1-1 0番台, 成長体験例(事例1~100)

この最初の100例には、筆者の担当した神経症・悩みなどの臨床相談例と教育分析例の計60例(カウンセリング例とよぶ)がまず含まれ、次いでその他の関係でその人の成長体験をたまたま詳しく聞くことができたもの40例がある(成長調査例)。広義の自己超越体験以外は、ほとんどが前論で記述したものである。

1-2 100番台, 参考体験例(事例101~200)

「その他のユニークな体験」100例を、成長体験例に準じて抽出したもので、常識ではとらえがたい「人間性」の考察にとって重要とみなしたものを、かなり任意に選んでいる。カウンセリングによっても回復があまり見られなかった人々、成長体験を持っていない人々の例を含んで多様である。とくに成長体験例における感受性、共同存在性、自己超越性、自覚的・社会的態度形成に対応して、それぞれ病的感受性や個性的感情世界の例、共生関係や自己喪失の例、成長とはいえないがユニークな自覚・実存様式の例、社会・文化・人類とのユニークなかかわり方の例を意図的に選んでいる。すなわちこの100番台のかなりの数は偏倚ないし病的な面を持ちながら、それが深い人間性を示唆するような体験ないし心的状態である。また苦悩の著しいケースには、臨床上からも注意が向けられるので、そうした事例を多く取り上げている。

1-3 200番台, 追加体験例(事例201~300)

「人間学」以後に得られた体験例であるが、ピーク体験21例及び自己超越体験19例以外は、通常の成長体験・治療体験は除いてあり、事例1~200以後の研究の裏付けになるようなケースを選んである。筆者が面接、観察ないし手記をいただいたもので、筆者の諸著作にふれて体験記・体験談を寄せられた方の例も多い。その半数以上は種々のピーク体験、超越体験、存在感・実存にかかわる体験や心的状態であるが、成長も超越もままならない人の独自の生き方ないし感受性に関する体験

例も多い。(平凡な人、弱い人、苦悩をいつまでも抱え続ける人の例、長期の病い、臨死、外的な苛酷な運命の人の例を意図的に拾い出している。)

以上がケースの選択の基準であるが、その基準のなかで比較的良好に記録されたものを選ぶなど、総じてケース選択はかなり任意である。また成長体験例以外(特に100番台200番台)のケース選択は、「常識ではとらえがたい人間性を示唆するもの」としたため、常識的、平均的ないし社会適応的な「人間性」の考察が、逆に背後に退いている面も否定できないと思われる。当然に一般人口の標本ではない。300例全体について、性別年齢構成をTable. 1として示す。職業的にはカウンセ

Table. 1 300例の性別・年齢別分布

	10代	20代	30代	40代	50代以上
男	12	83	28	17	23
女	11	79	34	4	9

セラー36, ケースワーカー, 教師及びそれに準ずる人23, その他のホワイトカラー及び産業労働者74, 学者31, 芸術家(作家を含む)7, 宗教家6, その他(自営, 無職, 頻回転職者等を含む)36, 主婦(児童相談の母親を含む)19, 学生(心理学関係専攻者が過半数)55, 中高生13, である。

2-1 前論の要約

本論に入る前に、前論における成長体験の契機・過程・内容についての要約を記す。まず成長体験例100例(0番台)について、その契機ないし原因は、カウンセラーを含む他者との出会い、カウンセリングを含む自己表現、欲求満足や行動による昇華、挫折・葛藤・苦悩の果ての脱皮、病氣・死への直面、意図的努力や修行の蓄積、社会的実践、その他及び契機のはっきり特定できないものに分けて数量的にとらえられた。次に、成長体験内容については、事後評定項目を設定し、各

ケースについて体験内容を評定整理した結果、次の諸カテゴリーについて、その頻数と体験例が明らかにできた。すなわち、a「生き生きした感情」「充実感」「積極性」などの評定項目による『生命感』、b「自由さ」「柔軟さ」等の評定項目による『解放感・開放性』、c「葛藤がなくなった」「神経症状の緩和」などの評定項目による『安らぎ』、d「ありのままの自分でいられる」「非防衛的態度」などの評定項目による『自己受容』、e「真の自己を見出した」「自己の位置づけ」「独立」などの評定項目による『自己確立・存在の実感』、f「自分の気持ちがあるがままに見えるようになった」「ごまかしや逃避ができなくなった」「自分の問題や欠点が見えてきた」というような、『洞察』である。このa～fはカウンセリング例に典型的なようであり、非該当例は、生命感よりも落ち着きが強調されている例、知的な洞察が強調されている例、感受性が特に強調されている例等である。一方、g『外界・自然・内面・他者の心などに関する感受性』、h『交わり』は、本論での問題にもかかわってくるものである。

2-2 ピーク体験

最後にいわゆる「ピーク体験」については、前論で「衝撃的な」「自分でも不思議な」「今までの人生においてほとんど体験しなかったような」「後々まで実感的に残る」体験であり、「無条件によきもの」、「自己の成長、解放ないし統合として体験されるもの」としてとらえた。全300例中合計38例で、生命的ピーク体験25、超越的ピーク体験13のうち、主として生命的ピーク体験について契機、過程、内容を前論で見てきたが、ここでは本論の対象になる超越的ピーク体験をも含めて、前論との若干の重複を厭わず記すことにしたい。超越的ピーク体験とは、3-1, 2で述べる広義の自己超越が含まれているもので、それ以外が生命的ピーク体験である。

まず双方とも前段階としてカウンセリングないし修行や苦悩の時期を経ているものが多

い（生命的ピーク体験で14/25、うちカウンセリング中の苦悩→生命的ピーク体験という例9/12。超越的ピーク体験でも13例全体を通してほとんど苦悩がないし修行の行き詰まりを前提にもっている。超越的ピーク体験についてはカウンセリング中に超越体験が訪れたものは2例、準ずるもの3例。）その他の契機としては、生命的体験では家からの独立、仕事や芸道など特殊な達成・適応課題と結びついて体験が表明しているもの3例、恋愛の出会いによるとみられるもの2例、超越的体験では苦悩の色彩の弱い宗教的修行8例及びトランスパーソナル心理学的な体験学習によるとみられるもの3例もある。さらに生命的、超越的ピーク体験ともに、契機がつかみにくいものがあり、上述の原因があっても直接のきっかけはよくわからないものがある。苦悩からの脱皮にしてみたとえば、何かを一生懸命やっているときに体験が訪れた例もあれば、日常のなんでもないことを契機に訪れた例もある。

体験内容に関しては、「生命力が急に回復した」などは生命的ピーク体験で強調され、「真の自己に気づいた」「急に光がさしてきた」「大地に根を下ろした」「人生の意義にふれた」等々の言葉で表現されているものは、いずれのピーク体験においても目につく。自己超越的ピーク体験ではさらに個を超えるニュアンスや死の恐れ消失、「永遠の生命」などのニュアンスが含まれている。自己超越的ピーク体験は、3例が3-1の共同存在的なものであるが、それを含み、3-2に述べる自己超越の特徴をかなりはっきり示している。

3-1 自己超越と共同存在

本論では300例全体について、まず広義の自己超越、すなわち他者・人類との共同存在の体験、及び狭義の自己超越の体験について述べる。（2-2ですでに述べた自己超越的ピーク体験の例を含んで考察する。）

このうち共同存在の体験20例は2-1hで述べた他者・外界との交わりを含み、その延

長線上にとらえられる面が多い。0番台8例、100番台2例、200番台10例（うちピーク体験3例）。

体験記述としては、「自分も他人もないような共感の境地」、「他者（特に愛する人）の方が自分自身よりも大切に思えてくる」、「他者の愛、自然の愛などによって自分が生かされるという気持ち」、などと表現される。家族愛7例、恋愛4例、その他9例で、一時的感動的体験としてのニュアンス（特に恋愛）と日頃の心的関係の状態としてのニュアンス（特に母子愛）のものがある。このほか人類共同存在ないし不特定の人々との共同存在体験は6例あげられる。それは、「人類の大交響曲に参加している」「人類すべて一体」などのプラス感情だけでなく、「人類の罪を背負わなければならない」といった、苦渋の体験も含んでいる。

3-2 自己超越の体験（狭義の自己超越）

宗教的たると否とを問わず、まさに自己にこだわらない、そして多くは個を存在の単位としなくなるような体験である。具体的な体験記述としては、「天地自然との合一」、「普遍との合一」、「時間空間を超えた存在感」、「無の境地」、「永遠の存在性」、「大きな力の実感」「それによって生かされているという実感」、宗教的な「神との合一」、または「神の愛にふれたような実感」、などと表現される。該当40例（0番台13、100番台2、200番台25）のうち、超越的ピーク体験（13例）は、すべてその人のその後の生き方に持続的、根本的な影響を与え、超越的世界を疑いないものにさせている。一方、その他の自己超越性については評定にかなり困難があるが、宗教的イメージ体験や想念を含め、徐々に自己超越を熟成させたとみられる例や心的状態として自己超越性を保っているといわれる人の例は12、思想的探索と不可分に表明されている例11を推定できる。イメージの集中の中での体験4などでも、内容的には似たものがある。宗教信者の体験でその教義と言語にしたがって表現されているとみら

れる例は仏教系6、キリスト教系5、その他3であり、それ以外は（宗教的背景を持った人は若干いるが）宗教教義を持たない人の例で体験表現も既成宗教の言葉を用いていない。なお少数ではあるが超能力、生前、死後の世界等の確信をともなったものもあり、特に東洋的な「気」を前提にしたりその実感を伴ったものは少なくとも4例ある。しかし総じてここでいう自己超越体験の本質は、宗教的体験ないしそれに準ずる超現実的体験、宇宙的合一、無、個を超えた存在性にあると思われる。

3-3 関連事項

以上に関連して、自己超越や共同存在の体験の前後に他者、外界の「存在」を著しくリアルに感じ取る体験をあげておきたい。他者の存在感は共同存在に結び付く面が多く、外界の存在感は自己超越に結びつきやすい。なおマイナスを含んだ100番台のものとしては、共生体験のほか、離人（2例）、多重人格（2例）、その他の自我の拡散や無境界・崩壊に近い例（3例）などがある。ほとんどは不安や苦悩をともなったものであり、体験それ自体を味わえるようなものではないが、比較的健康で、これらの感覚を楽しんでさえいる例もある。これらは共同存在体験や自己超越体験との間に多くの接点を見出すことのできるものである。

4-1 内的世界と感受性の諸相

以下の叙述でも、0番台の成長体験例に比して、100番台、200番台のケースが重要な位置を占め、またある時点での体験というよりは、継続的心的状態としてのニュアンスが強い。

すでに前論の、成長体験としての感受性（2-2g）で、他者の心に対する感受性、自然に対する感受性、社会的感受性、芸術的的感受性、宗教的ないし自己超越的的感受性などを、0番台の成長体験としてみてきた。

成長体験例においては、なお感受性の高次の側面ないし内的世界のヴァリエティーというべきものが観察されており、例えば

「自己の内面の複雑な感情のひだへの感受性」「矛盾を含んだ自己の世界の受容」「他者・外界に対するきめ細かい感受性」「自己と外界との交わりが、瞬間瞬間の意味を充実させている」「同じくその交わりが心の宝として蓄積されていく実感」「日常的な葛藤や不幸にもかかわらず、自己の深いところでのより大きな統合ないし意味の実感」「感受性ゆえに他者の苦悩、社会的矛盾に苦しむ」などに従来筆者は着目してきた。(19例)

一方100番台、200番台のケース200例については、今回もっぱら内的状態に目を当てて分析した。その観点は、感受性に加えて存在感、交わり、趣味・嗜好を含んだ内的感覚の状態ないし感情・欲求の傾向である。まず「苦悩の中の感受性あるいは感受性ゆえの苦悩」(18例)が病理的ケースを含んで評定されている。さらに「偏倚的ないしある側面での異常な感受性」(偏倚的性愛、その他の偏倚的嗜好、分裂気質者の先鋭な体験等々35例)が主として病理的状态のものとしてとらえられる。このうち「ドロドロした(魔的な)内面の感受」(甘え・愛憎・支配・破壊等々)がとくに強調されているもの19例。このほか(程度の問題ではあるが)病理性の低い何らかの「ユニークな感受性」(45例)を評定したが、この中には下町文化や故郷の文化に対する感受性、自然感受性、社会問題への感受性、思想的・学問的・芸術的・宗教的な独自の着想なども含まれる。(ここでも魔的なドロドロした心性を述べているもの22例がある)。このうち多数が感受性を特定領域の活動(科学・芸術・臨床・社会活動等)に生かしているとみられる。なお感受性というよりは、成就・達成動機においてユニークなケースも17例あり、またその他の注目されたケースとして愛、社会的役割などでユニークなものもある(16例)。

4-2 社会・精神病理的類型

社会・精神病理的類型としては、300例全体を通して、精神病(寛解状態のもの)6、神経症ないし心因反応31、性格の偏りないし

異常22、犯罪・非行15(うち6例は性格偏倚と重複)、アルコール・薬物依存7、児童相談の母親10等である。具体的には歓楽街やヤクザの世界、戦後浮浪者の世界を、かなり楽しんでいたとみられるもの、絵の才能をもち楽しんでいた非行少年の例、アルコール依存症で浮浪しながら哲学を論じていた人や明るい多弁な社交家、家族に暴力をはたらきながらも会社では人気のある人、眠剤依存症で律儀な仕事熱心な人や業績のある学者、性的異常(同性愛、フェティシズム、サドマゾヒズム)の人、ユニークな世界を綴りながら自殺に至った人、精神病の寛解状態で特異な豊かな世界を示した人など多彩であり、神経症や性格偏倚を含んで個性的な内面が豊かに展開されている。

このほか軽度の神経症傾向や性格の偏りを持った人のさまざまな例があげられ、それらを含んで悲喜こもごもの青春の体験例、学問・芸術・宗教・社会活動等の領域での豊かな心的世界の例が展開されている。外向的で明るい、天性的といってもよいような調和のとれた人柄で豊かなアポロ的な世界を示している人、その他さまざまな群像があげられる。

5-1 社会的実存

実存的態度に関する体験の中で、まず広義の社会的実存に関するものとして教育、福祉、労働運動、その他の社会的実践者の例、その他の「社会・文化・人類的存在性に関する体験」を先に取り上げる。300例全体を通して社会的実存的態度が強調されているもの23例、そのうち11例は社会思想(主として戦後民主主義、社会主義)ないし使命感に根ざした人の例である。このほか社会的職業的役割上の活動に自覚的に自分を賭けていった人の例がかなりあり、「すすんで責任を引き受ける」「社会的に役に立ちたい」などの気持ちが表明されている。また、これら実践的態度の例のほか「生活の蓄積」「生活文化の意味」「人々の生活のニュアンス、個別的人間像の実感」「それらの集積としての社会・文化の実感」などの体験は、明らかな記述としては

少ないが、推定的にはかなりの例にみられると思われる。それが社会的実践につながり、あるいは「全人類の一体感」といった共同存在の超越体験に結びついている人の例もある。

5-2 態度形成に関する体験

その他の自覚的態度形成の体験ないし心的態度はやや評定に困難があり、深い面接によってはじめて自覚が表明されるようなものであるが、比較的推定可能なものとしては、まず苦悩や運命を打開する態度、ないし苦悩や運命の中での積極的態度(11例)があげられる。

次いで、同じく苦悩や運命を受け入れる態度ないし心性(26例)であり、この中には家族などの死の受容、自己の老い、病、死の受容、その他の外的運命や自己の弱さの受容が含まれる。ただし受容といっても「ある時には受容できている」といった方が正確な例の方が多く、他の瞬間には、受容も悟りもままならない弱さや運命に喘ぐ心性のケースも含まれている。その他の積極的態度形成の例は、もっとも評定困難であるが、あえてあげれば、社会的実存の場合と同じく何らかの思想に基づいて(あるいは自らの思想形成において)態度形成がなされているとみられる例29が特徴的である。自己超越体験と関係したものもあり、その他哲学的・宗教的思想を背景としているものの他は、個人の性格と密接に結びついて多様な思想的態度形成がなされているとみられる。

総じて積極的自覚的態度としては、「生命的な自己が一つの人生態度として定着し、それを自己満足に終わらせずに他者・社会に還元しようとする態度」「苦しみを受け容れ、前提とした上で生きる勇気」「自己の人生(運命を含む)を積極的に引き受けようとする意志」「個人的、社会的な責任性の自覚」「究極的な自由、主体性の実感」「自己・他者を問わず、かけがえのない「人間」の実感とその尊重」などが自覚的態度形成の体験記述としてあげられる。

その他の実例としては、「常識を超えた信

念」を持ち、あるいは「真実」とでもいえる何者かに向かう態度を表明しているもの、

「目先の実用主義的学問・社会活動や日常的芸術・宗教に対してアンチテーゼを唱えるもの」、トランスパーソナルな視点を持った実存的探求のもの、逆にきわめて常識に立脚した態度形成をしていると思われる例、何でもない当たり前のことを淡々と行っている(敢えて自覚さえ問わない)人の例などがあげられる。

この自覚的態度の内容についてはもちろん個人個人の性格や思想を反映して多彩である。この中には筆者が「実存的Tグループ」と名付けていた体験学習グループの参加者も含まれており、また、人間論を論じ合う研究グループで知り得たケースも含まれている。こうした中で、例えば同じ人間愛をつきつめていったときにそれが社会的な助け合いや社会活動に直結する人と、非社会的内面のみをとらえる人との差など、実存様式の差には様々なものがある。

運命受容については、自己の限界や弱さの認識、人間そのものもつ限界や不条理の認識にたった態度形成が問題になっている。すなわち「限界の認識」とそれに対する態度として「苦しみを受け容れ、前提とした上で生きる勇気」「マイナスを含みながらも自己の人生を積極的に引き受けようとする意志」「自分は自分でしかない」「運命に身を預ける」その他これに準ずる人間の限界や弱さの自覚、運命の受容などに関する実存が目ざれるところである。自己のどうにもならない運命(身体障害・性格障害・外傷体験など)の運命受容の体験、長期病床にある人の病苦の受容、臨死者の死の受容などにはきわめて重いものがある。

以上、前論及び本論を通して、筆者の「人間学」、「人間性心理学大系全10巻」の基礎になった体験例を全体として概観してきたが、サンプリング自体からして、筆者なりの視点(人間観)によっていることは否めない。し

たがって客観的体験科学としては、他の研究者の得たデータと総合して考察を進めるべきであろう。すでに人間性心理学大系では、そうしたデータや文献をもかなり用いてはいる。しかしやはりその根幹をなすものとしては、筆者自身による、この300例のデータを用いてきたわけで、今回それを考察の対象としたことによって、それが筆者の著述の体験科学

的性格を示す何らかの参考になればと願っている。

なお、本資料は、前論とこの続編の出版の間に、全体を通した記述がほぼ同文で「人間の可能性と限界」（大日本図書1994）の付記として出版されていることをお断りしておきたい。

以上